

# ヒンドゥー研究の動向

## —国際的専門誌を中心に—

高橋 堯則

### 0. はじめに

本論文は、ヒンドゥー研究のサーヴェイを目的としている。単にヒンドゥー研究といっても非常に広範で深い研究分野であるため、ここでは国際的に展開するジャーナルの内 3 誌に焦点を絞りサーヴェイを試みる。対象とするジャーナル 3 誌とは、*Journal of Hindu Studies*, *International Journal of Hindu Studies*, *Nidān: International Journal for Indian Studies* である。これら 3 誌の創刊理由、編者の関心、そして取り上げられたトピックを紹介することを通じ、ヒンドゥー研究における近年の動向について理解を深めようと思う。

この試みを行うにあたって、以下のような章構成に沿って本論は展開する。第 1 章においては、それらジャーナル 3 誌に関する概要や創刊理由を紹介し、各ジャーナルの基本的な情報を把握したい。第 2 章においては、各ジャーナルの編集委員を務める研究者の著作物から彼らのヒンドゥー研究への関心を取り上げる。各ジャーナルで展開される研究及びその編者たちの見解を明確に反映させるため、本論文において“Hindu”と“Hinduism”という語をそれぞれ「ヒンドゥー」「ヒンドゥーイズム」と訳している。このように訳したのは、「ヒンドゥー教」と訳すことで暗に示されてしまう世界宗教モデルという想定から離れて、本論文で取り扱う資料や著作物において示されるような、その「イズム」としての性格を強調したためである。第 2 章では、それらの著作物を参考に、その語に関する各編者の見解やそこから示されるヒンドゥー研究の新たな地平を明らかにしたい。そして第 3 章では各ジャーナルで取り上げられたトピックについて扱い、特に最近刊行された特集号で取り上げられているトピックの中から『バーガヴァタ・プラーナ』研究とディアスポラ現象研究の二つに焦点を絞り具体的な研究の展開を見ていく。

### 1. ジャーナル 3 誌に関する情報

#### 1-1 *Journal of Hindu Studies*

*Journal of Hindu Studies* はオックスフォード大学に所属するオックスフォード・ヒンドゥー研究センター (Oxford Center for Hindu Studies: OCHS) のジャーナルであり、2008 年から刊行されている。OCHS のホームページによれば、OCHS は 1997 年にヒンドゥー文化を研究する世界で最初のアカデミーとして設立された。現在も OCHS は、あらゆる時代・地域に存在するヒンドゥー文化・社会・哲学・宗教・言語の研究に携わっており、教育・出版・研究という包括的なプログラムを通してインドの文化遺産に関する理解促進に寄与することが意図されている<sup>(1)</sup>。このような方

針の下、OCHS は、(1)ヒンドゥーイズムと近代性 (Hinduism and modernity)、(2)古典的ヒンドゥーイズム (Classical Hinduism)、(3)宗教間対話と宗教インターフェイス (Religious dialogue and interface)、(4)ヒンドゥー諸文化に関する歴史的パースペクティブ (Historical perspectives on Hindu cultures) という四つの枠組みにおいて様々な研究プロジェクトを行なっている<sup>(2)</sup>。

このようなヒンドゥー研究を展開している OCHS の機関誌、*Journal of Hindu Studies* は、様々なトピックを切り口に批判的なアプローチに則ったヒンドゥー研究を試み、広大な研究者コミュニティ同士を結びつけることで、他分野の専門を持つ研究者からの意見を交えた学際的かつ建設的な議論のためのフォーラムを作ることを目指している<sup>(3)</sup>。*Journal of Hindu Studies* の編集主任であるギャビン・フラッド (Gavin Flood) は、創刊号の巻頭言において、「研究史における初期の段階で行われてきたヒンドゥーイズムに対する過剰な一般化と漠然とした分節化を修正する手段として、ジャーナル刊行当時からヒンドゥー研究は専門分化の流れにあった。しかしながら、研究者自身の専門に留まるのではなく、その専門領域から一步踏み出し、異なる専門を持った研究者同士で議論し意見を交換するフォーラムが必要であった」と言及している<sup>(4)</sup>。またフラッドはこのようなフォーラムが希求された別の理由として、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件を挙げている。フラッドによれば、この事件を受けて、宗教という主題はパブリック・ディスコースの中心的な舞台となり、文化ポリティクスやアイデンティティ・ポリティクスと密接に結びついた主題としてより強調されるようになったことで、ヒンドゥーイズムないしヒンドゥーを取り巻く社会・政治・アイデンティティについて、より詳細な研究が必要になった、という。このように、専門分化に対する懸念や歴史的事件という背景から、*Journal of Hindu Studies* は新たなパースペクティブから論点を考察し、批判的な議論を可能とするフォーラムをヒンドゥー研究に携わる世界中の研究者に用意した、というのである。このジャーナルは、新たな着眼点から研究を行っていく上で、文学理論・記号論・現象学・言語学・歴史学などの様々な研究分野で使われている諸理論を取り入れ議論することを研究者に奨励している。また、同誌は研究活動に必然的に伴う現象、つまり研究「対象」の設定や「方法論」の設定などに暗示される研究者の意識的また無意識的なバイアスを内省的に精査することも求めている。

## 1-2 *International Journal of Hindu Studies*

*International Journal of Hindu Studies* は Springer より 1997 年に創刊された。先述の *Journal of Hindu Studies* と同様に、このジャーナルもまた学問横断的な性格を有している。人文学・社会科学における幅広い学問分野の諸理論を取り入れるために他分野の研究者による寄稿を受け付けており、ヒンドゥー研究の更なる進展を目指している<sup>(5)</sup>。

編集主任のスシル・ミッタル (Sushil Mittal) は、創刊号の巻頭言において、このジャーナルの研究関心について言及している。ミッタルは、幅広い歴史的状況・経済・政治に対しヒンドゥーイズムがどのように適用されるのかについて関心を寄せているだけでなく、ヒンドゥーの「生活様式 (form of life)」にも着目している。ここでいう「生活様式」とは、各時代・地域に生きるヒンドゥー人たちの「基底部で (on the ground)」働き、特殊な社会的・文化的・心理的な現象や様々な問題を発生させる様式であると定義されている。*International Journal of Hindu Studies* は、ヒンドゥーイズムと他の宗教及び様々な現象とを比較することで相違点や類似点を発見し、そこから浮かび

上がるヒンドゥーの生活様式を探究しようと試みているのである。このような試みを行う上でも、このジャーナルは多領域の研究者による寄稿を求めており、複数のパースペクティブから研究することを研究者に推奨している<sup>(6)</sup>。

### 1-3 *Nidān: International Journal for Indian Studies*

*Nidān: International Journal for Indian Studies* は 1989 年に創刊され、現在南アフリカのクワズール・ナタール大学 (University of KwaZulu-Natal) から刊行されているジャーナルである。その各号はデータ化されており、*Nidān* のホームページ<sup>(7)</sup>や電子論文を扱っているインターネットサイト Sabinet において閲覧することができる。Sabinet のホームページにおける説明によれば、*Nidān* は、他の専門を持つ研究者による寄稿を受け付けており、彼らの諸理論を導入することによって、新たなヒンドゥー／ヒンドゥーイズム研究が展開されることに期待を寄せている<sup>(8)</sup>。

1989 年創刊号の巻頭言によれば、当初このジャーナルはダーバン・ウエストヴィル大学 (University of Durban-Westville) <sup>(9)</sup>におけるヒンドゥー研究学科 (Department of Hindu Studies) のジャーナルとして発刊された。実際、創刊当時におけるジャーナルの名称は *Nidān: Journal of the Department of Hindu Studies* であった<sup>(10)</sup>。この巻頭言において、ヒンドゥーイズムはダイナミックな生活様式であると見なされており、異なる構造と機能を内包した複合的な現象であると述べられている。またその多様性を指摘する一方で、ヒンドゥーイズムにおける様々な伝統が単一かつ組織的であり、完全で調和した統一体を構築しようとする傾向を有していることも認めている。多様性と統一性を伴う複雑なヒンドゥーイズムの実像に迫ろうとする姿勢は「第一原因 (primary or essential cause)」「診断・分析 (diagnosis)」「純正 (purity)」「正しさ (correctness)」という意味を持つ “Nidān” (Skt. Nidāna) という語をジャーナルのタイトルに採用していることから伺うことができる<sup>(11)</sup>。

当初、*Nidān* はヒンドゥーイズム研究の学術雑誌であったが、この実像に迫ろうとする姿勢はヒンドゥーイズムの枠にとどまるものではなかった。実際にこのジャーナルは 2016 年に大きな方針の変更を行なっている。すなわち、これまでのヒンドゥーイズムに限定し研究する方針を改め、ヒンドゥーイズムを含めたインドの歴史・地理・宗教・哲学・社会・文化など、そしてインド人コミュニティやインド人ディアスポラに関連するトピックを広い文脈で研究考察していくという方針を打ち出したのである。名称についても、中途より採用されていた *Nidān: International Journal for the Study of Hinduism* から *Nidān: International Journal for Indian Studies* に変更された。今日のグローバル化時代にあたってヒンドゥーを含めたインド人が世界全体に離散 (移住) している「ディアスポラ現象」に見られるように、インド人を取り巻く環境は変化している。インド内部また外部におけるインド人の生活及び彼らのヒンドゥーイズムはその地域・時代の環境に応じて様々な様相を呈するようになった。この事実を受けとめて、*Nidān* はインド人及びヒンドゥーイズムに影響を与える政治的・社会的・文化的な文脈を考慮に入れる必要があるという認識に基づき、幅広いスタンスに立脚する研究を実施するジャーナルであることを表明したのである<sup>(12)</sup>。

これらジャーナル 3 誌に見られる創刊時の意図は、ヒンドゥー研究において学際的に議論できる場を世界中の研究者に提供しようというものであった。そして、これらのジャーナルは、ヒンドゥ

ーイズムという宗教にのみ限定してはいない。その研究の対象はヒンドゥーイズムという宗教に対する問いだけでなく、ヒンドゥーたちの多様な生活様式にまで及んでいる。そして、*Nidān* による近年の方針変更が表すように、各時代・各地域のヒンドゥーを取り巻く状況に関しての問いまでもが焦点となっている。いわばこれら3誌におけるヒンドゥー研究は、宗教に関する問いだけでなく、その問題を含めた全体的な問題に対処しようとしているのである。第1章を受けて、次章では各ジャーナルの編集委員を務める研究者の「ヒンドゥー／ヒンドゥーイズム」に対する関心を掘り下げ、研究の理論的な地平を明らかにしたい。

## 2. 各編者の関心

### 2-1 *Journal of Hindu Studies* 編集者の関心

*Journal of Hindu Studies* の編集主任ギャビン・フラッドは、中世時代におけるシヴァ派のテキストについて研究を行い、宗教学や現象学にも関心を寄せている。彼は2014年にブリティッシュ・アカデミーのフェローに選出され、2016年にイエール大学シンガポール校 (Yale-NUS University) の宗教学科教授に就任した。その大学の講師紹介ページによれば、彼の研究関心は大きく三つに分類することができる。第一に、グローバルな文脈において宗教がどのように持続していくのかという関心であり、進化生物学や社会認知に関する学問に加え、解釈学や現象学を取り入れた学際的なアプローチを用いて、この問題に取り組んでいる。第二に、具体的な歴史研究を通じた諸宗教の比較であり、そして第三に、サンスクリット語テキストの文献学的研究である。フラッドは、これらの研究関心の下で、深い文献学的な読みと広い哲学的な関心とを結びつける宗教学の視点から研究対象を分析しようと試みている<sup>(13)</sup>。

フラッドは1996年に出版された入門書 *An introduction to Hinduism*<sup>(14)</sup> と2003年に出版された編著 *The Blackwell Companion to Hinduism*<sup>(15)</sup> において、ヒンドゥーイズムに関する単純な定義<sup>(16)</sup> を本文の冒頭に提示している。すなわち、「ヒンドゥーイズムは、自分たちを「ヒンドゥー」と称するインドやネパールに生きる大多数の人々と他の大陸に生きる一部のコミュニティーが信奉する宗教を表す術語」というものである<sup>(17)</sup>。しかしフラッドはこの定義に基づいて本文を展開させているわけではない。フラッドはこの定義をかわきりにより深い次元へと読者を導こうとしているのである。

1996年の入門書において、「ヒンドゥーイズム」の定義に関する問いを立てているが、宗教概念が使用者によって意味されることが異なることを指摘している。彼がこの入門書を書いた当時、世俗的な見地から宗教的な現象を政治的な現象に還元しようとする議論が盛んであった<sup>(18)</sup>。彼もまた宗教を社会的・文化的な文脈の内部に位置付けることを認めているが、彼は宗教の特徴として「聖なるもの」に言及しており、彼は聖と俗のカテゴリーが実体的なものではなく相対的なものであることを強調した。聖性は様々な文脈（時間・場所・人間・対象など）に応じて顕現し、その状況によって変化する。このように、ヒンドゥーイズムの聖性は深く、豊富な宗教的イマジネーションを証明するに足るほど様々な形態を通して伝えられる、と彼は主張している。このことを想定したヒンドゥー研究の成果は、現代世界の様々な文化における人間の経験を理解することに役立ち、宗教研究には様々な方法論を生かして分析・考察することが求められると彼は指摘している<sup>(19)</sup>。

2003年の著作においても、フラッドは「ヒンドゥーイズム」の定義について取り上げており、それに関する研究者の見解を三つにまとめている。第一に、その術語が多様な信仰・実践・歴史を示

しているために、正当な意味や指示対象を持たないという見解である。このように蓋然的にヒンドゥーの諸伝統を包括してしまうような西洋人により創り出された「ヒンドゥーイズム」概念が指摘されるのに対して、第二の見解はヒンドゥー自身による「ヒンドゥーイズム」概念を強調し、彼らのアイデンティティ形成に関わる問題を内包しているという見解である。この見解に基づき、ヒンドゥーイズムは信仰・実践・歴史のある統一化されたフィールドとして捉えられ、植民地主義に対するヒンドゥーの争いの歴史を内包し、国民国家形成に関わる問題を内包した存在であるとみなされた。第三に、ヒンドゥーイズムに明確な領域を設定することは難しいが、ヒンドゥーの諸伝統はカースト、輪廻の思想、解脱、バクティのような共通の諸特徴を有しているため、その諸特徴によってヒンドゥーの諸伝統は結び付けられるという見解である<sup>(20)</sup>。「ヒンドゥーイズム」に関する様々な議論を紹介しつつ、フラッドはヒンドゥーイズムに求心的・遠心的な傾向を見て取っている。例えば、儀礼の正当な手続きを求めてヴェーダ聖典を根源とする伝統もあれば、それから離れて、地方語をベースに独自性を育む伝統もまた存在する。集中と分散の傾向に見られるヒンドゥーのアイデンティティ・ポリティクスがテキスト注釈上の言説・儀礼・物語に関わることで、そのコミュニティにおけるヒンドゥーイズム／ヒンドゥー・アイデンティティが形成されてきたことをフラッドは強調している<sup>(21)</sup>。

フラッドと同じく *Journal of Hindu Studies* の編集委員であるジェシカ・フレイジャー (Jessica Frazier) は、ケント大学宗教学科の上級講師であり、オックスフォード大学のフェローを務めている。彼女は博士課程をケンブリッジ大学クィーンズカレッジで過ごした。そこで、近世のヒンドゥー思想家ルーパ・ゴースヴァーミン (Rūpa Gosvāmin) とハンス＝ゲオルク・ガダマー (Hans-Georg Gadamer) の哲学的解釈学を研究し、それ以来、存在と自我、諸文化内の哲学、そして新たな価値理解の方法という問題について継続して研究している。現在彼女は、古典ヒンドゥー思想、形而上学・自我・美学・価値に関するインド哲学的見解、古典ヴェーダーンタ、近世ベダベダ派 (Bhedabheda)、神に関するアジア的概念を含めたインド思想、ポスト・ヘーゲル派哲学、現象学、解釈学、存在と存在論、そして自我とアイデンティティに関心を寄せ、価値と情緒に関する哲学的・現象学的テーマにも注目している<sup>(22)</sup>。

彼女は、フラッドを序文に迎え、編著 *The Continuum Companion to Hindu Studies*<sup>(23)</sup> を 2011 年に出版している。この書は、ヒンドゥーイズムの研究に関する研究動向を詳述し、ヒンドゥーイズム研究における重要なテーマを取り上げ、各テーマに対する近年の学術的アプローチ・方法論などを紹介している。以下に彼女のヒンドゥーイズムについての見解について触れておきたい。

彼女はその書のイントロダクションにおいて、ヒンドゥーイズムの特性を複合性と継続性（一貫性）とに分けて、自身の見解を示している。その際、彼女はブライアン・スミス (Brian Smith)、ジュリアス・リップナー (Julius Lipner)、ルイ・デュモン (Louis Dumont) による「ヒンドゥーイズム」の定義を引き合いに出している。スミスは、ヒンドゥーイズムの定義を固定的なものとして捉えるのではなく、その語を用いている人々の経験・関心・伝統に応じて変化し、その語が用いられた目的との関係の中で捉えられるべきものとしている。リップナーは、インド人がヒンドゥーイズムの定義づけに関し様々なアプローチを持っており、それらアプローチによってなされた様々な定義が可能で、決して単一の形式に終始してはいないと指摘している。そしてデュモンは、日常生活と宗教生活とは根本的に異なり、宗教生活の内部で見られるものは非常に異質であると思われるが、そ

れら異質なものが日常生活を取り巻く全体的な宗教文化を補完し機能させていると考えている<sup>(24)</sup>。彼らのヒンドゥーイズムに関する見解から、彼女はヒンドゥーの宗教伝統における内的な多様性とその関わりによって生じる一貫した性格を指摘し、アウトサイダー側やインサイダー側からヒンドゥーイズムという図式化された概念が創出されていることを述べている。彼女は、ヒンドゥーイズムを「ロープ」に例えている。そのロープとは様々な糸によって編み込まれており、地域や時代に応じてそのロープは短くもなり長くもなる、という。このメタファーは、様々な宗教文化が互いに影響し合い、内的な多様性と柔軟性を持った新たな伝統を紡いでいく過程、またミクロな諸伝統は互いを模倣し、互いに対立し、時に他方に対する反発的な影響を及ぼし合うような様々な作用を含む過程を表している。このメタファーを用いて、フレイジャーはその全体的な過程の現れをヒンドゥーイズムとして捉えているのである<sup>(25)</sup>。このようなヒンドゥーイズム観に基づき、これまで見逃されてきたオーラル・ヒストリーなどの研究対象を解釈学的手法によって分析する可能性、また直面する文化的・社会的・政治的文脈に応じて、「生きている」宗教伝統が別の伝統と時に交わり、時に反目し、新たな伝統、アイデンティティ、また新たな「ヒンドゥーイズム」を形成していく過程を探究する可能性を示唆している<sup>(26)</sup>。

## 2-2 *International Journal of Hindu Studies* 編集者の関心

*International Journal of Hindu Studies* の編集主任を務めるのは、現在アメリカ合衆国のジェイムズ・マディソン大学 (James Madison University) の宗教学科教授スシル・ミッタルである。大学ホームページにおける講師紹介ページによれば、彼の専門は人類学であり、モンリオールのマギル大学 (McGill University) で学士号を、オタワのカールトン大学 (Carleton University) で修士号を、そしてモンリオール大学 (Université de Montréal) で博士号を得て、2004年にジェイムズ・マディソン大学で勤め始めた。彼は、ヒンドゥー研究とガンディー研究に関心を寄せ、インドにおける社会・文化・宗教の問題に取り組む民族誌的な研究とテキスト研究を行なっている。ミッタルは自身のガンディー研究で、ポストモダン・モダン・プレモダンの社会思想を、そして西洋の科学・技術・スピリチュアルな伝統と非西洋におけるこれらの伝統をつなぐ架橋としてガンディーを評価しており、グローバルな文脈においてその研究を試みている<sup>(27)</sup>。

彼はヒンドゥーイズムや南アジアの諸宗教に関する入門書の編集を手がけており、その入門書は共通の性格を帯びている。その一つは、宗教概念論の問題を前提にしていることである。例えば2004年に出版された *The Hindu World*<sup>(28)</sup> の第1章にリブナーを招き、「ヒンドゥーイズム」に関する議論を展開している。また、2018年に出版された *Religions of India: An Introduction*<sup>(29)</sup> においても同様に比較宗教に伴う宗教諸伝統の一般化について論じている。どちらの入門書においても特徴的なのは、共通した章構成がされていることである。例えば *The Hindu World* において、ヒンドゥーイズムを学ぶにあたって重要な名詞 (ヴェーダとウパニシャット、シヴァ、ダルマ、カルマなど) を章の名称に採用し、各研究者はその名詞をもとに論じている。また、*Religions of India: An Introduction* においては、南アジアの諸宗教について、世界宗教モデルを基に章組みを行なっている。例えば、第1章は“Hindu Dharma”，第2章は“Jaina Dharma”，第3章は“Sikh Dharma”を扱っている。宗教概念論や世界宗教モデル批判に基づいて入門書を編集するには、これらの章構成は、辞書的であり、無配慮とも取れる。しかし、ミッタルは意図してこのような章構成にし

ているのである。というのも、ヒンドゥーイズム研究の入門者・学生を対象としていることもあり、議論を進めていく上でキーワードとなる用語の解説を優先したことも理由の一つであるが、これらのキーワードないしインドの「諸宗教」を出発点とすることで、その章構成自体を問題視してもらおうと読者を導くために企図されたのである。例えば、*Religions of India: An Introduction* は3部構成になっているが、最初の2部においてインドの各宗教を論じ、最後の第3部において世界宗教モデルに対する批判を論述している。ちなみに第3部の本文における始まりの語は“Congratulations”で始まり、一文空けて“Yes, but ...”とつながっている<sup>(30)</sup>。

このように彼はこれまで南アジアの諸宗教を論じる際に取りられた固定的な術語表現を問題視し、そこから離れた宗教諸伝統の多様性を明らかにしている。そして、その多様性を明らかにする上で、問われるべき論点を本文で挙げている。例えば、ヒンドゥーイズムは単一の宗教、密接に関連する諸宗教の集合体、また「宗教」ではなく、全く別の存在として考えるべきか？ヒンドゥーと呼ばれるカテゴリーの領域はどれほど固定的で、また柔軟であるのか？ヒンドゥーの両親から生まれていない人々、ヒンドゥーのアイデンティティを持つ先祖を有してはいるが本人はヒンドゥーのアイデンティティを持っていない人々について、彼らはヒンドゥーのカテゴリーに含まれるのか？シク教徒やジャイナ教徒はヒンドゥーに含まれるのか？ヒンドゥーであることについて権威をもって語る事ができるのは何者か？その必要な資格・条件とは何か？ヒンドゥーイズムを研究する上で適用される妥当な方法・理論とは？などの問いが挙げられている<sup>(31)</sup>。このような論点が問われる契機の一つとして、ヒンドゥー移民の存在を考慮しなくてはならない、という。実際に移住したヒンドゥーはそのホスト社会におけるアイデンティティと民族的なアイデンティティを有している。これは特定の国家に籍を置くことがナショナル・アイデンティティの一構成要素であるに過ぎないことを意味し、実際に国際的な関係の中で生きるヒンドゥーもいれば、国民としての意識を離れて生活するヒンドゥーもいる<sup>(32)</sup>。彼らに象徴されるヒンドゥー／ヒンドゥーイズム概念の変容は、固定的かつ本質化した概念の意味を問う一例であると指摘されている。

### 2-3 *Nidān: International Journal for Indian Studies* 編集者の関心

*Nidān* の編集主任である P・プラタップ・クマール (P. Pratap Kumar) は、南アフリカに位置するクワズール・ナタール大学の名誉教授である<sup>(33)</sup>。彼はアメリカのカルフォルニア大学で Ph.D をとり、ヒンドゥーイズムとディアスポラ現象との関係やインド研究における「古典的」・「現代的」カテゴリーに関心を払っている。これらに関するクマールの主要な著書として、*Contemporary Hinduism*<sup>(34)</sup>、*Classical and Contemporary Issue in Indian Philosophy and Religion*<sup>(35)</sup>、*Hinduism and Diaspora: A South African Narrative*<sup>(36)</sup>が挙げられる。

彼の議論で興味深いのは、「古典的」と「現代的」というカテゴリー間の問題である。2013年に出版された *Contemporary Hinduism* において、これまでのインド研究ないしヒンドゥー研究について、古典的なテキスト研究をいわば特権化し現代的な諸論点に対して軽視する傾向が指摘されている。彼はここで、その現代的な諸論点を取り扱う研究が必要であることを主張している。というのも、ヒンドゥーの諸伝統はいわゆる「古典」に分類されるものを本質として一元化するにはあまりにも多様な形態で表現されており、特にグローバルな展開を見せるヒンドゥー・ディアスポラ現象が示すように、現在進行形で新たな伝統が創造されている事実を直視すれば、これまでの研究の

方法では扱えきれない現実が存在するからであると言及している<sup>(37)</sup>。

そして彼は 2013 年に出版された *Classical and Contemporary Issue in Indian Philosophy and Religion* において、「古典的」と「現代的」のカテゴリー間における関連性を指摘しているのである。先の著作物と同様に、彼は、全体的にインドに関する研究は現代的な論点に対して古典的なトピックを理想的な過去としてみなしてきたと述べている<sup>(38)</sup>。このような学問上のバイアスは、オリエンタリストの言説に関係していた。その言説は、求められる存在として、インドが過去に生み出すことができた最も良きものとして、そしてインド＝ヨーロッパ語族の関係を持つ存在として、古典に特別な地位を与えた。このような古典の特権化に対して、現代的なものは古典を基準に評価され、ほとんどの場合、墮落したものとして描写されてきた、という。また、古典を研究する者はその時代を重点的に分析する傾向に陥り、一方で現代的な論点を扱う研究者は、その論点が現代的であることから、それが確認される後世の時代にその研究対象を限定してしまうという傾向に陥っていることが指摘されている。このように、いわば専門分化のような形でもってヒンドゥーイズムを研究してきた歴史に対し、彼は両者の関連性を強調した。かつて「現代的」なものが今や過去の「古典的」なものとなり、今の「現代的」なものが未来で「古典的」なものとなるように、彼はその年代記の循環的な性格を指摘し、時代に関する価値判断を越えたフィールドでインド研究ないしヒンドゥー研究を進めるべきであることをここで明らかにしている<sup>(39)</sup>。

この編著は T・S・ルクマニ (T. S. Rukmani) というヨーガ研究者の記念論文集の体を成している。彼女はヨーガという古典的な伝統分野を研究しただけでなく、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ、プラーナ、叙事詩に関する研究、環境、非暴力、女性などの近代社会における諸論点、自身の信仰と学問研究との関連性に至るまで幅広く関心を寄せていた。クマールは *Classical and Contemporary Issue in Indian Philosophy and Religion* を編集するにあたって、彼女の研究関心の守備範囲を生かし、古典や現代に特化した研究ではなく、複眼的な視野から研究していく姿勢を明らかにしたのである<sup>(40)</sup>。

このように、各編者はヒンドゥー／ヒンドゥーイズム概念に対して世界中の地域に存在するヒンドゥーの宗教伝統を同質化して語る世界宗教モデルを越境し、その抽象語に内包される多様性と一貫性、そしてヒンドゥーたちが自身のアイデンティティを形成していく多様な過程を指摘している。また、「古典的」なものに対し本質的な価値を固着させず、「現代的」な論点への言及と「古典的」・「現代的」との関連性を指摘することで、ヒンドゥーイズムの通時的な関係を明らかにしている。彼らは総じてヒンドゥー／ヒンドゥーイズムを生きた文脈の中に位置付け、これまで一元化されてきたこれらの理解からその多様性と一貫性とを明らかにしようと努めている。そして、このような見方を基にし、ジャーナル 3 誌は具体的にテーマを設定し寄稿を募っている。次章では、実際これらジャーナルの特集号が近年取り上げたトピックについてその研究の展開を見ていきたい。

### 3. 特集号のトピック

#### 3-1 『バーガヴァタ・プラーナ』研究

『バーガヴァタ・プラーナ』は大プラーナに分類されるプラーナ聖典の一つであり、この聖典は 12 巻で構成されている。その第 10 巻において、ヴィシュヌ神のアヴァターラーであるクリシュナ



の人生が語られ、他の章では、ナーラダ賢人の物語、マハーバーラタ戦争後の物語、宇宙の創造、ヴィシュヌ神が変化する猪のアヴァターラー、ダクシャの生贄、サティー、インドラ神と悪鬼ブリトラとの戦いなどが語られている。デイビッド・N・ロレンツェン (David N. Lorenzen) による『バーガヴァタ・プラーナ』の項によれば、人々が霊的に墮落するカリ・ユガ期において、ヴィシュヌ神またその化身であるクリシュナに対してのバクティが女性を含めての救いの道であると『バーガヴァタ・プラーナ』において語られる<sup>(41)</sup>。『バーガヴァタ・プラーナ』の中心的な関心は、この聖典の聞き手・読み手をバクティの理想的な対象であるクリシュナに導くことである。この聖典に関して、橋本泰元は「このプラーナは、最高的人格神クリシュナと牛飼女ゴーピーたちの甘美な恋愛感情 (mādhuryabhāva) こそが至高のバクティのあり方であり、神性への個我の融合・解消である解脱 (mukti) を説く従来の一元論的救済論を超えた、神と個我の永遠の共働関係 (līlā : 「遊戯」) を至高の目標と説く」<sup>(42)</sup>と言及した。このように、『バーガヴァタ・プラーナ』は多くの人々を救いの道に誘うバクティ信仰の源であったのである<sup>(43)</sup>。

このような『バーガヴァタ・プラーナ』を対象とする研究の新たな取り組みが、*Journal of Hindu Studies* と *International of Journal for Hindu Studies* 両誌の特集号で取り扱われている。

第一に、*Journal of Hindu Studies* の特集号で示される『バーガヴァタ・プラーナ』研究について言及したい。そこでは、この聖典が、先にも触れた信仰の源という側面だけでなく、豊富な種類の各伝統 (地方語版の翻訳本、口述された物語、舞踊や戯曲など) におけるインスピレーションの源として捉えられており、そしてこのような様々な顕現の形に応じて、『バーガヴァタ・プラーナ』はインドないしその国境線を越えた地域にまでも広がりを見せる「生きている伝統」であると捉えられている<sup>(44)</sup>。

しかしながら、この特集号は、このテキストに関するアカデミックな研究が不足していると指摘している。ヨーロッパ言語によるこのテキストの翻訳は、フランス人オリエンタリスト、ウジェーヌ・ビュルヌフ (Eugene Burnouf 1801-1852) によって初めて行われ、1840年から1847年にかけて、3巻のフォリオ版で出版された。そして、この翻訳本はサンスクリット語のテキストとフランス語の翻訳とを合わせた形で構成された。しかしながら、このような翻訳本があったにもかかわらず、オリエンタリストが持つプラーナ聖典内のセクシャルな描写に対する偏見、また彼らがアリア文化をインド文化の「起源」とみなし、そのアリア文化を探究するためにヴェーダ聖典研究へと傾倒していったことなどの理由のために、『バーガヴァタ・プラーナ』に関する十分な研究がされてこなかった、という<sup>(45)</sup>。そもそもプラーナ聖典自体の研究は、原本と二次的な資料を分類するには困難なほどに資料が膨大に存在したため困難であった。

本特集号では、その研究を改めて行おうとする意思を表明し、未だインド研究者によって開拓されていない、このテキストに対する注釈の伝統、地方語翻訳、そしてパフォーマンスなどによって作り出された宗教と文化の巨大な体系へと接近しようという志が明らかにされている。この目標を達成するために、*Journal of Hindu Studies* の発刊元である OCHS は、近年『バーガヴァタ・プラーナ』に関する共同研究のための中心組織となって研究プロジェクトを作成し、二つの研究段階を経ていることをここで明らかにしている。一つ目の研究段階において、OCHS は2冊の著作物を出版した。1冊目は2013年に出版された *Bhāgavata Purāṇa: Sacred Text and Living Tradition* であり、『バーガヴァタ・プラーナ』のテキストに加えて、その受容の歴史、パフォーマンスの伝統に

関するオリジナリティに富んだ研究論文を掲載している<sup>(46)</sup>。そして 2 冊目の著作物は 2017 年に出版された *Bhāgavata Purāna: Selected Readings* であり、『バーガヴァタ・プラーナ』の英訳化されたサンスクリットテキストとその注釈を掲載している<sup>(47)</sup>。二つ目の研究段階において、OCHS はマドラス大学とチェンナイの C・P・ラーマスワミ財団 (C. P. Ramaswami Foundation) とともに 2017 年 1 月に “The Bhagavata Purana: History, Philosophy, and Culture” と名を冠した会議を催した。この会議を受けてこの特集号が組まれることとなり、ここで掲載されている諸論文はその成果に基づいている<sup>(48)</sup>。例えば、バーバラ・A・ホルドレッジ (Barbara A. Holdrege) は、『バーガヴァタ・プラーナ』の翻訳行為に備わるダイナミズムについて触れている。ホルドレッジは、タミル地方のバクティ詩人アールヴァール (ālvār) が形成する信仰伝統において、『バーガヴァタ・プラーナ』が重要な位置を占めており、この聖典が美的で情熱的で忘我的なクリシュナ・バクティの新たなタイプを表現していると主張している。そして、自分たちの信仰を正当づけ普及させるために、アールヴァールはサンスクリット化・ヴェーダ化の手続きを踏み、またその信仰の根源をなす独自の伝統を保持するため地方語化のプロセスも並行して取り組まれていたことが指摘されている<sup>(49)</sup>。

第二に、*International Journal of Hindu Studies* の特集号における『バーガヴァタ・プラーナ』研究の展開について言及したい。ここでは、『バーガヴァタ・プラーナ』が受容状況によって、その形態を変化させる性質があると着目している<sup>(50)</sup>。特にその性格を “transcreation” という語で言い表している。この語は “translation” が表す以上の含意を表現するため採用された。例えば、サンスクリット注釈の詩や他の学問的な文献を通して、『バーガヴァタ・プラーナ』の地位をヴェーダーンタの権威体系 (pramāṇa) の中に確立しようとする試みが歴史的に展開された。また一方では、サンスクリット語の言語的境界や詩的な因習を越えて、芸術のような新たなフォーマットにより再構築する試みも展開された。このような『バーガヴァタ・プラーナ』の学問上の展開や芸術上の展開に見られる多様な創造的営為を言い表すために、“transcreation” という語が用いられている<sup>(51)</sup>。

この特集号の諸論文はハイデルベルク大学の南アジア研究所で 2013 年に催されたワークショップの成果に基づいている。これらの諸論文は『バーガヴァタ・プラーナ』の “transcreation” について神学・詩・芸術のカテゴリーに沿う形で手がけられ、サンスクリット語・ペルシア語・ブラジュ・バーシャー語 (brajbhāshā) との『バーガヴァタ・プラーナ』の関わりを明らかにしようとしている。例えば、置田清和は『バーガヴァタ・プラーナ』に表されるブラジュ地方のゴープーとクリシュナとの関係に関するプレコロニアル期の議論に着目している。彼はこの期間に作られた『バーガヴァタ・プラーナ』に関する注釈書・解説書を分析し、そのクリシュナの物語に関する “transcreation” のプロセスを辿ることで、議論の複雑性を明らかにしている。そして、その物語にまつわる文献が生み出されることで、近世インドのヒンドゥー神学者は知的な想像力を育むことができたとは指摘している<sup>(52)</sup>。また、モニカ・ホルストマン (Monika Horstmann) は近世ラージプート王朝における『バーガヴァタ・プラーナ』の受容について関心を寄せている。ラージプート王朝が『バーガヴァタ・プラーナ』を根本聖典として取り上げるヴィシュヌ派のバクティを王朝支配の宗教的基盤に据えながらペルシア文化を組み込むことで、近世インドのヒンドゥー・ペルシア文化を形成したことを彼女は特集号に寄稿した論文で明らかにしている。ヒンドゥー・ペルシア文化の形成には宮廷詩人や北インドの書記カースト「ムンシー」(Munshī) が関わっており、彼らによ

る『バーガヴァタ・プラーナ』の地方語訳およびペルシア語訳に伴う“transcreation”の過程もまた明らかにしている<sup>(53)</sup>。

このように両誌において、『バーガヴァタ・プラーナ』を着眼点にし、その創造的な性格や社会的状況に応じた変質と受容、そしてその聖典を基盤とした宗教コミュニティの活力を明らかにしようとする姿勢が見て取れる。ここで明らかになるのは、『バーガヴァタ・プラーナ』に見られるヒンドゥーイズムの創造的な様相であり、研究者たちはその様相を探究することに力を注いでいるのである。

### 3-2 ディアスポラ現象研究

最初に注意しておかなければならないのは、ディアスポラ現象が近年生じ始めた現象ではないということである。かつてより南アジアの人々はインド亜大陸の外の領域に移動していた。例えば、紀元後まもなく、バラモンの集団が東南アジア（現在のカンボジア、タイ、バリなど）に移動したことが確認されている<sup>(54)</sup>。マーヤ・ウォーリアー (Maya Warrior) による「ディアスポラ」の項は、この時代におけるディアスポラ現象に加えて、それより後代において大規模なインド人移動が生じた時期としてコロニアル期と第二次大戦後の二期を紹介している<sup>(55)</sup>。このようにインド人ないしヒンドゥーのディアスポラ現象は長い歴史を有し、世界の各地域で彼らのコミュニティが形成されていった。

歴史的に見られるこの現象に対して、伝統的に反感の意識を特に高位カーストのヒンドゥーは持っていたとされる。この反感の意識は浄・不浄の観念に由来し、インドは聖なる土地であると理解され、未知の土地を訪れることは不浄とみなされ、ヒンドゥーの社会秩序を脅かすものとされた。この土地に対する感情を考慮すると、その土地から離れるという行為は同意しかねるものであったのである。このような傾向を同様に過去のヒンドゥー・ディアスポラ研究者は持っていたとウォーリアーは言及している。彼らはインド亜大陸内のヒンドゥーイズムを正当なもの・中心的なものとして捉え、インドのヒンドゥーイズムとインド外の地域におけるヒンドゥーイズムとの相違を強調した比較研究が進められた。この研究傾向を受けて、例えばスティーブン・ヴェルトヴェック (Steven Vertovec) のような近年の研究者は、インドのヒンドゥーイズムを正当とみなす図式を離れて、インド外地域のヒンドゥーイズムが有する独自性に基づいて研究する必要性を喚起し、インド外のヒンドゥーたちは自分たちを体系づけて表象し、外国の地でヒンドゥー・コミュニティを再創造しようと努めていたことを指摘した。また同様に、インドの人々はインド外地域への移住に際して、時代ごとに異なったプロセスを経てきたために、そのプロセス自体も研究する必要があるとヴェルトヴェックは主張している<sup>(56)</sup>。その比較研究に関しても、異なる社会文化的文脈を横断する人々を各々比較すること、外国に移住したヒンドゥーたちのコミュニティ内部における様々なグループ間の比較研究も望ましいものとしてみなされている。この比較研究での着目すべき点として、ウォーリアーは、異なるグループ間の相互認識、ヒンドゥーの世代間における価値観や実践の相違、そして次世代への継承問題を挙げている<sup>(57)</sup>。

このようなディアスポラ現象に対する関心の下に、*Nidān* では 2015 年に特集号が組まれている。ここではタイの事例を基にディアスポラ研究における重要な問いが提示されている。それは、移住先で暮らすヒンドゥーたちがかつての宗教実践とどのように調和しているのか、という問いで、こ

の問いは未だ十分に研究されてはこなかったとしている<sup>(58)</sup>。例えば、エーラーワーンの祠 (Erawan shrine) に表されるように、インドにおいて現在主流ではない古代のヒンドゥー儀礼であるブラフマー崇拜が、現在タイ社会に生きるヒンドゥーたちによって実践されているという事例がある<sup>(59)</sup>。エーラーワーンの祠は、1956年のエーラーワーン・ホテル建設で発生した事故の災難を祓う目的で造られた。民間においても自宅や仕事場にブラフマーの祠を造るなど、その信仰は広がりを見せており、これを受けてバンコクのヒンドゥー・サマージ寺院は民間の需要に答える目的でブラフマーの像を祀るまでに至った。このようにかつての宗教実践がタイに住む現在のヒンドゥーたちに大きな活力を与えているのである。この事例は、移住したヒンドゥーたちの宗教実践がその時のインドにおいて展開されている実践のみに限定されているわけではないことを意味している。かつて移住したヒンドゥーによって、現在主流となっていない実践がインド外の土地で保存されており、その保存されていた実践が現在移住してきたヒンドゥー・コミュニティの宗教表現を形成する要素として機能していることがこの特集号の中で示されている<sup>(60)</sup>。

また、*Nidān* は 2018 年の間にディアスポラ現象に関する特集を 2 号に渡って設けている。これらを通じて、ディアスポラ現象における民族・宗教性やアイデンティティの問題が取り組まれている。これら前後半に分かれた特集号は、これまでのディアスポラ現象に関する研究で前提となっていた「インド」をヒンドゥーイズムの中心地と措定する傾向を批判している。ヒンドゥーが実践する新たな様式や、ヒンドゥーのコミュニティが移住先の土地における政治的環境と向き合いながらその土地の特徴をどのように神聖化していったのかという点を研究する上で、そのような傾向は不利に働くものとしてみなされている<sup>(61)</sup>。

その前半部に当たるパート 1 において、特にアメリカ合衆国とカリブ海諸島の二地域に絞り、この問題について議論している。その地に生きるヒンドゥーの先祖たちが、どのような経緯で移住してきたのか、過去現在においてどのようにそのホスト社会と向き合っているのか、そこからヒンドゥーたちはどのような信仰表現を構築し後の世代に伝えているのか、などの問いが提起されている<sup>(62)</sup>。そして後半部に当たるパート 2 においては、どのようにディアスポラ・ヒンドゥーイズムが形を成し実践されてきたのかが問われている。具体的には、ジェンダー化された規範がどのように支持され、批判されたのかという議論、またオーラルな伝統とテキストの伝統・デジタルメディア・世俗領域を通してヒンドゥーイズムがどのように展開しているのかという議論がなされている<sup>(63)</sup>。例えば、この特集号において、トリニダードの民族音楽パンチャラート (panchrāt) の礼拝における女性の地位に関する研究があり、女性によって実践されるパンチャラートによって、女性たちは自らの存在や力を示すことができると指摘されている。このようなカリブ海における女性の地位に関する論文はこれまでになされたカリブ海ヒンドゥーイズム研究の反省を生かして書かれている。これまでの研究は、その土地における最大規模のヒンドゥー組織である Sanatan Dharma Maha Sabha を重要視してきた。その組織に単に焦点を絞ることによって、これまでの研究者はその土地の民族宗教の異種混交性を過剰に単純化していたことが述べられている。この論文において、その土地の女性の役割を明らかにすることで、その異種混交性を示すための別の視点を提供している<sup>(64)</sup>。また、この特集号においては、グローバルに展開する男性的なナラティブに関する論文もあり<sup>(65)</sup>、またディアスポラ現象により生じてしまったグルと信者間の地理的な距離を埋め、身体的な束縛を離れて信者の信心を自由に表現する場として、ウェブサイト・アプリ Bochasanwasi shri Akshar

Prushottam Swaminaryan Sanstha (BAPS) を研究している論文もある<sup>(66)</sup>。

これら特集号の編者は、改めて移住先の地域におけるヒンドゥーの生活に目を向け、様々な過程を経て形成されていったそれぞれの歴史を参照し、複雑化されたディアスポラ現象のダイナミックな現実を明らかにしようとしている。ここで、これからディアスポラ研究に関わろうとする研究者に対して、それらの移民の歴史に注意を向けること、自らヒンドゥーと言い表す人々の諸グループ間における相互干渉に着目すること、そしてヒンドゥー・アイデンティティがその土地における特殊な権力構造を反映していることが特に考察されなければならない要素として挙げられている<sup>(67)</sup>。

#### 4. おわりに

このように近年のヒンドゥー研究は多方面に渡り、そしてその研究はヒンドゥー／ヒンドゥーイズムのより深い次元を探究しようという傾向があることがわかった。そして、第1章で示したように、その研究を実行に移すにあたって、既存のヒンドゥー研究分野のみならず、様々な専門分野からの知恵を獲得し利用しようと試みていることがわかった。また、研究対象に対する研究者自身の先入観さえも問題視し、研究者の内省自体もその研究の一部であるとみなされていることは興味深い。そのような先入観に対する関心は、第2章で示したように、アウトサイダー側とインサイダー側両方で用いられてきた「ヒンドゥー／ヒンドゥーイズム」概念や「古典的」「現代的」というカテゴリーに対する関心にまで及んでいる。このような概念・カテゴリー使用に伴って生じてしまうヒンドゥー諸伝統の一般化によって、各時代・各地域におけるヒンドゥーたちの生きた生活は見落とされる可能性がある。しかし、近年のヒンドゥー研究者は、ヒンドゥーの実像に迫れるように、それら概念・カテゴリーを精査し研究に取り組んでいる。第3章において、このような関心に基づき、具体的にどのような研究が進められているのかという研究事例を紹介した。そこで見られたのは、様々な文脈に応じ形成され根付き伝播していく多様なヒンドゥーの宗教生活に迫ろうとする研究者たちの試みであった。本論文で取り上げられなかった様々なテーマ・トピックがある。例えば、『バーガヴァタ・プラーナ』以外のヒンドゥー聖典に関する批判的研究、ヒンドゥーの聖人に関する研究、「身体論」を導入したヒンドゥーイズム研究など多々存在する。限りある紙面の関係上、本論では新たな視座から取り組まれている「ヒンドゥー／ヒンドゥーイズム」研究の傾向とその一端を示すことに限定させて頂いた。今回取り上げたジャーナルやヒンドゥー研究を扱う著作物には、ヒンドゥー／ヒンドゥーイズムの研究から導き出されるたゆまない「人間」への問いが秘められていると思われるので参考にして頂ければ幸甚である。

#### 謝辞

本論文で取り扱ったジャーナル、特に *Nidān: International Journal for Indian Studies* に関して、その編集委員を務められている天理大学の澤井義次先生から当事者でしか得られない情報を提供していただいたことを、ここで感謝申し上げたい。

#### 註

(1) The Oxford Centre for Hindu Studies, “About,” <https://academic.oup.com/jhs/pages/Abo>

ut\_The\_Oxford\_Centre\_for\_Hindu\_Studies (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日)

- (2) The Oxford Centre for Hindu Studies, “Research,” <http://www.ochs.org.uk/research> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日) (1)の枠組みにおいて、三つのプロジェクトが計画され行われた。その一つは「ヒンドゥーとクリスチアンの諸関係に関するプロジェクト」(Hindu and Christian Relations Project) であり、主にイギリスにおけるヒンドゥーとクリスチアンとの関係について調査し、2010 年の 7 月から 12 月にかけてロンドン・レスター・プレストンのヒンドゥーとクリスチアンに対しインタビューが行われた。その成果は報告書の形でまとめられ、OCHS のホームページからダウンロードできる。他には、「イギリスにおけるヒンドゥーイズムのオーラル・ヒストリーに関するプロジェクト」(British Hinduism Oral History Project) や「ヒンドゥーの若者に関する研究プロジェクト」(Hindu Youth Research Project) が行われた。(2)の枠組みにおいて、『バーガヴァタ・プラーナ』研究プロジェクト」(Bhagāvata Purāṇa Research Project), 「シャクタ派伝統に関するプロジェクト」(The Sakta Traditions), 「ゴスヴァーミー時代 :近世南アジアにおけるガウディーヤ派ヴァイシュナヴィズム」(The Gosvāmī Era: The Founding of Gauḍīya Vaiṣṇavism in Early Modern South Asia), 「考古学とテキストに関するプロジェクト」(Archaeology and Text Project), 「近代におけるベンガル・ヴァイシュナヴィズムに関するプロジェクト」(Bengali Vaishnavism in the Modern Period) が行われている。(3)の枠組みにおいて、「宗教再考プロジェクト」(Rethinking Religion) と「インド哲学におけるカテゴリーに関するプロジェクト」(Categories in Indian Philosophy Project) が行われている。(4)の枠組みにおいては先の(2)のプロジェクトと重複するが、「考古学とテキストに関するプロジェクト」が行われている。
- (3) The Oxford Centre for Hindu Studies, “About the Journal,” <https://academic.oup.com/jhs/pages/About> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日)
- (4) Gavin Flood, “Introduction to the Journal of Hindu Studies,” in *Journal of Hindu Studies* (vol.1, Issue 1-2, Oct. 2008) pp.1-2. ISSN: 1756-4263
- (5) Springer Link, “International Journal of Hindu Studies Description,” <https://link.springer.com/journal/11407> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日)
- (6) Sushil Mittal, “Editorial,” in *International Journal of Hindu Studies* (vol.1, Issue 1, April 1997), pp.1-2. ISSN: 1574-9282
- (7) *Nidān* のホームページは以下のアドレスにある。 <http://nidan.ukzn.ac.za/Homepage.aspx>
- (8) Sabinet, “*Nidān: International for Indian Studies*,” <https://journals.co.za/content/journal/nidan> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日)
- (9) University of KwaZulu-Natal, “History of University of KwaZulu-Natal,” <https://web.archive.org/web/20110820070130/http://www.ukzn.ac.za/About-UKZN/UKZN-History.aspx> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日) この大学は、南アフリカでアパルトヘイトが実施されている最中、インド人のためのユニヴァーシティ・カレッジとして 1972 年に設立された。現在はクワズール・ナタール大学のキャンパスの一つになっている。
- (10) この後も名称が変更されており、1994 年の時点では、*Nidān: Journal of The Hindu Studies & Indian Philosophy* となっている。

- (11) “Editorial,” in *Nidān: Journal of the Department of Hindu Studies* (vol.1, No.1, Dec. 1989) pp. i-ii. ISSN: 1016-5320
- (12) この方針転換に関して、*Nidān* の編集委員を務める天理大学の澤井義次教授から 2018 年 11 月に情報を得ることができた。2016 年というタイミングで方針を変更したことに関し、2016 年のアフリカ宗教学会において、南アフリカのヒンドゥーイズムを理解するためには、ヒンドゥー教以外の宗教伝統、特にキリスト教との関わりを考慮することが重要であると指摘された。このことが方針変更の背景にあると澤井教授は言及している。
- (13) Campion Hall Jesuits in Oxford, “Professor Gavin Flood, FBA,” <http://www.campion.ox.ac.uk/user/50> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日) / Yale-NUS University “Yale-NUS College welcomes two distinguished scholars as named professors,” <https://www.yale-nus.edu.sg/newsroom/yale-nus-college-welcomes-two-distinguished-scholars-as-named-professors/> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日) / Yale-NUS University, “Gavin Flood,” <https://www.yale-nus.edu.sg/about/faculty/gavin-flood/> (最終閲覧日 2019 年 1 月 8 日)
- (14) Gavin Flood, *An Introduction to Hinduism* (Cambridge, Cambridge University Press, 1996).
- (15) Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism*, (Oxford, Blackwell Publishing, 2003).
- (16) ヒンドゥーイズム定義に関するリーダーとして、J. E. Llewellyn ed, *Defining Hinduism A Reader* (London, Equinox Publishing Ltd, 2005) が挙げられる。
- (17) “Hinduism is a term which denotes the religions of the majority of people in India and Nepal, and of some communities in other continents, who refer to themselves as ‘Hindu’,” Gavin Flood, *An Introduction to Hinduism*, p.5. / Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism*, p.2.
- (18) Gavin Flood, *An Introduction to Hinduism*, p.9. その代表的な著作物として、フラッドは Nicholas B. Dirks, *The Hollow Crown* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1993) を挙げている。
- (19) *Ibid.* pp.8-10.
- (20) Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism* (Oxford, Blackwell Publishing, 2003) pp.2-5. フラッドはここでその定義に関する様々な研究者の見解を紹介している。例えば、バラガンガードハーラ (S. N. Balagangadhara), インデン (Ronald Inden), キング (Richard King) は、南アジア伝統の多様性を「ヒンドゥーイズム」という一語で言い表してしまうこと自体が西洋による権力の行使であり、そしてそのことが西洋によるインド支配願望の現れではないのかと指摘し、「ヒンドゥーイズム」が、西洋＝啓蒙的という想定から、インド＝専制的、神秘的、不合理などの他者表象を表しているとポストコロニアル的な見地から主張した。またフォン・シュティーンクロン (H. von Stietencron) のように、文献学の見地から「ヒンドゥーイズム」を考える研究者もおり、この術語を使用することによって、インドの様々な宗教を単一の宗教として扱ってしまうことを批判した。またフィッツジェラルド (Timothy Fitzgerald) やシュタール (Frits Staal) のように、「宗教」カテゴリーをイン

- ドの文化形態に当てはめることを問題化し、その使用にはキリスト教神学的含意があると指摘する研究者もいた。フラッドが本文中で参照した彼らの文献は以下の通りである。S. N. Balagangadhara, *“The Heathen in his Blindness...”: Asia, the West, and the Dynamic of Religion* (Leiden, Brill, 1994) / R. Inden, *Imagining India* (Oxford, Blackwell, 1990). / R. King, *Orientalism and Religion: Postcolonial Theory, India and the Mystic East* (London and New York, Routledge, 1999). / H. von Stietencron, “Hinduism: On the Proper Use of a Deceptive Term,” in *Hinduism Reconsidered*, edited by G.-D. Sontheimer and H. Kulke (Delhi, Manohar, 1997) pp.32-53. / T. Fitzgerald, *The Ideology of Religious Studies* (Oxford, Oxford University Press, 2000). / F. Staal, *Rules Without Meaning: Ritual, Mantras, and the Human Sciences* (New York, Peter Lang, 1989).
- (21) Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism*, p.3.
- (22) Oxford Centre for Hindu Studies, “Dr Jessica Frazier,” <http://www.ochs.org.uk/people/dr-jessica-frazier> (最終閲覧日 2019年1月8日)
- (23) Jessica Frazier ed., *The Continuum Companion to Hindu Studies* (London and New York, Continuum, 2011).
- (24) Jessica Frazier, “Introduction: New Visions of Hinduism,” in *ibid.*, p.3. 彼らの文献は以下の通りである。Brian Smith, ‘Who Does, Can, and Should Speak for Hinduism?’, in *Journal of the American Academy of Religion* (vol. 68, No.4, Dec., 2000) pp.741-749. / Julius Lipner, *Hindus: Their Religious Beliefs and Practices* (Abingdon, Routledge, 2010). / Louis Dumont, *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications*, translated by Mark Sainsbury (Chicago, University of Chicago, 1970 [original 1966]).
- (25) Frazier, *op. cit.*, p.3.
- (26) *Ibid.*, pp.4-7. 例えば、フレイジャーが *Journal of Hindu Studies* に投稿した論文 Jessica Frazier, “Hermeneutics in Hindu Studies,” in *Journal of Hindu Studies* (vol.1, issue 1, 2008) pp.3-10. ISSN: 1756-4263 において、彼女はヒンドゥー研究に解釈学的な手法を導入することについて述べている。「単純化」「還元化」「体系化」されたテキスト解釈に終始するのではなく、豊富なテキストの種類、テキスト間で各々異なる目的、そしてテキストを解釈する上での様式の違いといった事実を直視する必要があることを彼女は指摘している。テキスト解釈の多様な営みが実際の宗教生活にどれほど影響を与えているのか、研究者はどのような位置に立ってテキストと読み手との対話を理解していく必要があるのか、などの問いを立てつつ、彼女は解釈学的な研究の可能性を明らかにしている。
- (27) James Madison University, “Dr. Sushil Mittal: Professor of Religion,” <https://www.jmu.edu/philrel/people/mittal-sushil.shtml> (最終閲覧日 2019年1月8日) 彼はガンディー研究に関して2012年に *International Journal of Gandhi Studies* を発刊している。
- (28) Sushil Mittal and Gene R. Thursby eds., *The Hindu World* (New York and Abingdon, Routledge, 2005) ISBN: 0-203-67414-6
- (29) Sushil Mittal and Gene Thursby eds., *Religions of India: An Introduction, second edition* (New York and Abingdon, Routledge, 2018).



- (30) Peter Gottschark, “Beyond the Introduction-Alternative Perspectives,” in *ibid.*, p.291. 第3部においてだけでなく、前の2部においても術語・概念が何を意味しているのかについて読者に考えてもらうように構成が練られている。第1部・第2部における各章の章末には、各章で取り上げられた「宗教」に関する論点がまとめられており、その論点を出発点にして読者の生活に関係する事柄についても考えてもらうような質問文が読者に投げかけられている。
- (31) John Grimes, Sushil Mittal, and Gene Thursby, “Hindu Dharma,” in *ibid.*, pp.79-80.
- (32) *Ibid.*, p.292.
- (33) The Conversation, “P. Pratap Kumar,” <https://theconversation.com/profiles/p-pratap-kumar-210182> (最終閲覧日 2019年1月8日)
- (34) P. Pratap Kumar ed., *Contemporary Hinduism* (New York and Abington, Routledge, 2013).
- (35) P. Pratap Kumar and Jonathan Duquette eds., *Classical and Contemporary Issue in Indian Philosophy and Religion Essays in Honour of Trichur S. Rukmani* (New Delhi, D.K. Printworld, 2013).
- (36) P. Pratap Kumar, *Hinduism and Diaspore: A South African Narrative* (Jawahar Nagar, Rawat Publications, 2013).
- (37) P. Pratap Kumar ed., *Contemporary Hinduism*, pp.1-3. この「古典的」「現代的」なカテゴリーについて、フラッドは1996年の入門書において文献学(言語学)の視点から言及している。インド学と結びついた19世紀以来の文献学(言語学)が、インド諸語のルーツを探る研究を行ってきたと彼は指摘している。自然科学と同類の学問として、そして時間的な変化により改変される前の実在的な秩序・理法をテキストの中に発見する学問として文献学はマックス・ミュラーなどの当時の学者から支持を集めた。しかし、後の時代のポストコロナル批評が当時の文献学(言語学)を批判し、インド諸言語を文化段階と直結させて現在のインド諸語を劣等化させるようなコロニアルの要素を持っていたと指摘した。その反省を受けて、文献学(言語学)は、より客観的にテキストに基づいて研究を進めていったが、そのテキストのオリジナルは何か?神学的な矛盾もなく、他のテキストから伝播されてきた要素もないテキストは存在するのか?存在するとしたらどの時代なのか?などテキストのルーツを求める傾向は根深かった。また彼は自身のタントラ研究からも純粋なテキストを探究する研究傾向の例を挙げている。タントラの最も純粋な形は、各世代へと伝えられていく過程で学者による誤り、写しの間違い、伝承者の怠慢によって失われてしまったと、歴史上のヒンドゥー哲学者・注釈者は考えていたと彼は指摘している。このように、「正当」「筆写」のカテゴリーは西洋の学問やインドの伝統的な学問においても見つけることができるが、フラッドはその「筆写」すなわちテキストが特殊な状況・文脈で形成されていった過程の研究をより進めていくべきであると主張している。Gavin Flood ed., *The Blackwell Companion to Hinduism*, pp.10-13. これに関連する問題として、「バラモン教」を哲学的な宗教として扱う一方で「ヒンドゥー教」をその俗化した宗教形態としてみなしてしまうというようなバイアスも考慮しなくてはならない。他には「アーリア人侵入説 (Aryan Invasion Theory)」の問題も挙げられる。この問題に関し、長田俊樹「はたしてアーリア人の侵入はあったのか?ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭のなかで-言語学・考古学・インド文献学」(『日本研究』23号, 2001年) pp.179-

226. ISSN: 9150900 において、その批判的な学説とヒンドゥー・ナショナリズムへの影響について扱われている。
- (38) P. Pratap Kumar, “Introduction,” in *Classical and Contemporary Issue in Indian Philosophy and Religion Essays in Honour of Trichur S. Rukmani*, edited by P. Pratap Kumar and Jonathan Duquette, p.1.
- (39) *Ibid.*, pp.1-2.
- (40) *Ibid.*, p.3.
- (41) David N. Lorenzen, “Bhakti,” in *The Hindu World*, edited by Sushil Mittal and Gene Thursby, pp.192-3. ISBN: 0-203-67414-6
- (42) 橋本泰元「カビールの伝記とその意味（河村考照教授退任記念号）」（『東洋学論叢』20号, 1995年）p.82. ISSN: 03858487
- (43) David N. Lorenzen, “Bhakti,” in *The Hindu World* edited by Sushil Mittal and Gene Thursby, p.193. ISBN: 0-203-67414-6
- (44) Ravi M. Gupta and Kenneth R. Valpey, “Introduction: New Directions in Bhagavata Purana Studies,” in *Journal of Hindu Studies* (vol.11, Issue1, 1 May 2018) p.1-2. ISSN: 1757-4255
- (45) *Ibid.*, p.2. / Herman Tull, “18 Myth,” in *Studying Hinduism Key Concepts and Methods*, edited by Sushil Mittal and Gene Thursby (London and New York, Routledge, 2008) p.257.
- (46) Ravi M. Gupta and Kenneth R. Valpey eds., *The Bhagavata Purana Sacred Text and Living Tradition* (New York, Columbia University Press, 2013).
- (47) Ravi M. Gupta and Kenneth R. Valpey eds., *The Bhagavata Purana Selected Readings* (New York, Columbia University Press, 2017).
- (48) Ravi M. Gupta and Kenneth R. Valpey, “Introduction: New Directions in Bhagavata Purana Studies,” in *Journal of Hindu Studies* (vol.11, Issue1, 1 May 2018) pp.2-3. ISSN: 1757-4255
- (49) Barbara A Holdrege, “The Dynamics of Sanskritising and Vernacularising Practices in the Social Life of the Bhagavata Purana” in *ibid.*, pp.21-37.
- (50) Monika Horstmann and Anand Mishra, “Introduction to Special Issue: Transcreating the Bhagavata Purana” in *International Journal of Hindu Studies* (vol.22, Issue 1, April 2018) pp.1-2. ISSN: 1574-9282
- (51) *Ibid.*, pp.2-3.
- (52) Kiyokazu Okita, “Ethics and Aesthetics in Early Modern South Asia: A Controversy Surrounding the Tenth Book of the Bhagavata Purana,” in *International Journal of Hindu Studies* (vol.22, Issue 1, April 2018) pp.25-43. ISSN: 1574-9282
- (53) Monika Horstmann, “Three Brajhasa Versions of the Bhagavata Purana,” in *ibid.*, pp.123-174.
- (54) Maya Warrier, “6 Diaspora,” in *Studying Hinduism Key Concepts and Methods* edited by Sushil Mittal and Gene Thursby, p.87. ウォーリアーによれば、バラモンたちはその土地に滞在し現地の人々と結婚しながら、自分たちが信奉する神々や聖典のようなバラモン文化の諸要素をホスト社会に導入していった。一方で、ホスト社会側もバラモン文化を受容するこ

とで、自分たちの王国を神聖なものとする基礎づけを行なった。キム・ノット (Kim Knott) の研究において、バンコクのデーバ・サターン寺院 (Dheva Satarn temple) やタイ王国の儀礼にブラフマー神の存在が見られ、今日まで重要性を保持していることが指摘されている。またラーマーヤナのパフォーマンスが民間の文化としてタイやインドネシアで確認されている。

- (55) *Ibid.*, pp.87-8. コロニアル期において、インドの人々は労働目的で他のイギリス植民地に移住し、そのホスト社会で様々な条件のもと労働に従事し自分たちのコミュニティーを形成していった。特にカリブ海諸島にインド人は移住し、奴隷制の代替とみなされる契約労働 (Indentureship) の下プランテーションで働いた。そして第二次世界大戦後において、イギリス本国への移住が見られ、その産業に労働力を供給した。その中には専門家 (多くの場合は医者) またビジネスマンといった熟練労働者・準熟練労働者がいた。20世紀後半に移民法によって多くの熟練労働者はアメリカに渡り、多くの場合エンジニア、マネージャー、医者となった者もあり、最近ではソフトウェア開発に携わっている者もいる。1970年代から南アジアからアラブ湾岸の諸国家に移住する動きも見受けられ、また「トゥワイス・ミグレーション (twice migration)」という現象も生じた。例えば、カリブ海のヒンドゥーがマイアミ、ロンドン、ニューヨークに移住する現象があり、またケニヤやウガンダで土着の民族を優遇する国民国家建設の動きを受けて、ケニヤのヒンドゥーとウガンダのヒンドゥーは1960年代・1970年代にイギリスに移住した現象もあった。そしてより最近の現象としては主にスリランカ・タミル人難民の移動が見受けられる。
- (56) *Ibid.*, p.93. ヴェルトヴェックの著作物として、ウォーリアーは以下の著作物をあげている。Steven Vertovec, *The Hindu Diaspora: Comparative Patterns* (London, Routledge, 2000).
- (57) *Ibid.*, p.94.
- (58) P. Pratap Kumar, "Editorial," in *Nidān: International Journal for the Study of Hinduism* (vol.27, No.1 and 2, July/Dec. 2015) p.ii. ISSN: 1016-5320
- (59) Ruchi Agarwal, "Hinduism Transformed? A Case Study of Hindu Diaspora in Thailand," in *Nidān: International Journal for the Study of Hinduism* (vol.27, No.1 and 2, July/Dec. 2015) pp.49-50. ISSN: 1016-5320
- (60) P. Pratap Kumar, "Editorial," in *Nidān: International Journal for the Study of Hinduism* (vol.27, No.1 and 2, July/Dec. 2015) p.ii. ISSN: 1016-5320
- (61) Prea Persaud and Priyanka Ramlakhan, "Indian Diaspora: Migration, Identity and Ethnicity (Part II)," in *Nidān: International Journal for Indian Studies* (vol.3, No.2, Dec. 2018) pp.iii-iv. ISSN 2414-8636
- (62) Priyanka Ramlakhan and Prea Persaud, "Introduction: Contemporary Expressions of Hinduism in the Indian Diaspora of North America and the Caribbean," in *Nidān: International Journal for Indian Studies* (vol.3, No.1, July 2018), pp.i-iv. ISSN: 2414-8636
- (63) Prea Persaud and Priyanka Ramlakhan, "Indian Diaspora: Migration, Identity and Ethnicity (Part II)," in *Nidān: International Journal for Indian Studies* (vol.3, No.2, Dec. 2018) pp.i-ii. ISSN 2414-8636

- (64) Krystal Ghisyawan and Natasha Mahabir-Persad, "Pachrat Song Tradition and Ritual Agency in Trinidad," in *ibid.*, pp.1-17.
- (65) Sucheta Kanjilal, "Muscular Mahabharatas: Masculinity and Transnational Hindu Identity," in *ibid.*, pp.18-39.
- (66) Deepali Kulkarni, "Digital Murtis, Virtual Darsan and a Hindu Religioscape," in *ibid.*, pp.40-54.
- (67) Prea Persaud and Priyanka Ramlakhan, "Indian Diaspora: Migration, Identity and Ethnicity (Part II)," in *ibid.*, pp.iii-iv.